

# 港湾振興便り



2016. 3

第106号

\*:

## 目次

\*:

### 1 ポートエッセイ

ー広がる日本酒の楽しみ方

地域活性化にも大きな効果ー

～日本港湾振興団体連合会会長（新潟市長） 篠田 昭～

### 2 トピック

- 『北海道「北極海航路」調査研究会』の開催  
(北海道総合政策部交通政策局 物流港湾室)
- 未来の担い手確保と公共事業をPR 学生向け工事見学会を開催～  
(近畿地方整備局 港湾空港部)
- 沖縄国際物流セミナーを開催  
(沖縄国際物流戦略チーム)
- 「第1回クルーズ船 またん めんそーれ フェスタ」を開催  
(NPO法人 ナハ・シー・パラダイス協議会)

### 3 お知らせ

- ◇ 深日港～洲本港航路客船試験運行イベント

\*:\*

1 ポートエッセイ

—広がる日本酒の楽しみ方  
地域活性化にも大きな効果—

～日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 篠田 昭～

\*:\*

一時「お酒離れ」が言われた日本酒が人気を取り戻しつつある。特に若い女性が静かな日本酒ブームを牽引しているというから、日本酒好きの私としてはわが意を得たり、である。港湾関係者のお酒好きは定評のあるところだが、私の暮らす新潟も酒どころだ。県内には90ほどの酒蔵があり蔵元の数は日本一。呑兵衛も多いらしく県民、新潟市民一人当たりの日本酒消費量は共に日本一である。

その新潟らしい酒のイベントが3月にある。「新潟淡麗にいがた酒の陣」だ。今年も、12、13の両日に新潟市朱鷺メッセで開かれた。新潟県酒造組合が主催し、県内の蔵元80社以上が参加する。1日2千5百円(前売りは2千円)で500種類以上の酒を味わうことができる。昨年は2日間で12万人が来場した大イベントだ。この酒の陣を支えているのも若い女性グループだ。若い女性に連れられて、若い男性も増えてきた。会場だけでは足りずに、夜は街に繰り出してくれるし、ホテルは満杯状態で、大変な活性化効果がもたらされる。

12年前に始まった酒の陣だが、初回はなかなか大変だった。当時は1日限定の開催で、参加料5百円を払うと「ぐい呑み」をもらえて、すべての酒を試飲できる。つまり呑み放題だ。この時とばかり「すべての酒に挑戦」などと張り切った方々が自らの酒量を超えてしまい、ついには救急車9台が出動する騒ぎとなった。

「こんなイベントはやめてくれ」との声もあったが、翌年からは千円に値上げしてペットボトルの水を一本「やわらぎ水」としてお付けし、以降大きな騒ぎは起きていない。いまや海外からもお客様が来てくれるまでに育った。

そんな新潟で、お酒をめぐる新しい動きが始まっている。地元の酒米やかけ米を使って「完全地元産」の日本酒をつくる取り組みが広がり始めている。地元の酒米「五百万石」や「越淡麗」の栽培が広がり、吟醸酒に向いているものの新潟では栽培が難しいといわれた「山田錦」に挑戦する農家も出てきた。「すべての蔵元がまずは1銘柄でいいから完全新潟産をつくり、売り物にしよう」との運動も始まった。

新潟市は農業戦略特区に選ばれているが、先日、JR東日本が地元農家と組んでJR新潟ファームを設立し、農業特区に参入した。今年から酒米を栽培し、地元酒蔵に納品する事業だ。まずは2ヘクタールから始め順次拡大する方針という。JR東日本は既に県内で日本酒を伴侶にゆったりとした旅を楽しむ観光列車を走らせてくれているが、広いネットワークを持つJR東日本と組むことで日本酒の可能性が広がる。

幅広いネットワークといえば、食の情報サイト「ぐるなび」との連携も始まっている。昨年、「地域活性化包括連携協定」を結んでくれ、新潟の食情報を広く発信してくれている。特にありがたいのが2月と8月に全国で展開する「ジャパン・レストラン・ウィーク」だ。ぐるなびのメガネにかなった料亭やレストランでお得感のあるメニューを提供する取組みで、昨年は市内13店舗が選ばれた。地方都市としてはトップクラスの店舗数だという。

今年は新潟限定で「SAKEレストラン・ウィーク」を酒の陣が終わった14日から2週間展開してくれている。今回は新潟市を中心に31店が選ばれ、特別のお酒も提供されるので、この機会にぜひ新潟の酒と味を楽しんでほしい。たかが酒というなかれ。酒の引き出す地域活性化効果は大きなものがある。

各地で実践例を増やして日本を楽しくしたい。

\*:

## 2 トピック

\*:

### ● 『北海道「北極海航路」調査研究会』の開催

(北海道総合政策部交通政策局 物流港湾室)



研究会の様子

平成28年2月17日（水）、道は『北海道「北極海航路」調査研究会』を札幌市内で開催し、道内の行政機関や港湾管理者から約50名の関係者が参加しました。

本研究会では、国土交通省の担当者や民間の研究者より、北極海航路に関する最新の情報についての講演があり、2015年シーズンの利用状況や今後の展望などが紹介されました。

続く話題提供では、苫小牧港管理組合から、航路活用における苫小牧港の取組が紹介されたほか、道が今年度策定した「北極海航路の利活用に向けた方針」に関して、策定の目的などを説明し、関係者が連携した取組の推進を訴えました。

参加者からは、国の北極政策についての質問や、具体的な貨物輸送を目指す提案などがあり、道内関係者の関心の高さが窺えるものとなりました。

道では、今後も本研究会を定期的で開催し、北極海航路に関する情報共有を図りたいと考えています。



国土交通省担当者の講演

### ● 未来の担い手確保と公共事業をPR 学生向け工事見学会を開催

(近畿地方整備局 港湾空港部)

近畿地方整備局では「建設産業の担い手確保」や「公共事業のイメージアップ」などを目的に、ホームページ上で『魅せる！現場』（工事現場の一般公開情報）並びに『魅せる！現場～現場を支える人々編～』（各現場で日々奮闘されている技術者の情報）を紹介し好評を得ています。

そんななか、近畿地方整備局和歌山港湾事務所は、普段目にする機会が少ない海上での社会資本整備の現場で、ダイナミックさなどの魅力を発信し担い手確保につなげようと、和歌山県立和歌山工業高校の生徒さんを対象とした防波堤築造工事見学会を平成28年1月28日に開催しました。

当日は、国内最大級の起重機船「洋翔」による重さ約2,500トンのケーソンを据付ける作業を見学いただき、生徒さんから「工事の規模などスケールの大きさにびっくりしました。海洋土木の仕

事にも挑戦してみたいです。」などの感想をいただきました。

また、今回の見学会は地元テレビ局並びに新聞社から取材いただき、それぞれ放映・掲載され事業のPRにもつながりました。

今後もこのような見学会を通じて、担い手確保だけでなく事業実施による効果など、その必要性や重要性についても多くの人々に発信していきます。

「魅せる！現場」URL: <http://www.kkr.mlit.go.jp/plan/genbakengaku/index.html>

「魅せる！現場～現場を支える人々編～」URL: <http://www.kkr.mlit.go.jp/plan/hitobitohen/index.html>



起重機船「洋翔」に釣り上げられるケーソン



ケーソンの前で緊張の面持ちの参加者



現場作業員からの作業工程説明



起重機船操舵室で操船方法など説明を受ける

## ●沖縄国際物流セミナーを開催

(沖縄国際物流戦略チーム)

平成28年1月15日(金)、沖縄市、うるま市及び沖縄国際物流戦略チームの共催により、「沖縄国際物流セミナー～中城湾港から広がる沖縄の国際物流のこれから～」を開催しました。

本セミナーでは、中城湾港の将来的な展望から沖縄の国際海上輸送の取組や課題等についての講演があり、約230名が聴講しました。

沖縄県トラック協会の佐次田朗会長は「沖縄の自動車輸送の現状と展望」として、中古車移入の現状や那覇港の過密さを説明し、中古車輸送の拠点としての中城湾港の利用について提案されました。また、JA全農の畜産生産部穀物課の森竜二課長は「中城湾港の飼料輸送の効率化」として、トウモロコシなど飼料の輸入コスト低減のため大型輸送船が接岸できる港湾の必要性について述べられました。JTBグローバルマーケティング&トラベルの大熊義孝営業推進部長は「沖縄のクルーズ観光について」として、クルーズ寄港地に求められる魅力と取り組むべき課題について説明されました。

本年は中城湾港新港地区の東ふ頭の暫定供用が予定されており、中城湾港を活用した効率的・効果的な物流体系の実現やクルーズ観光について考える場となりました。

(事務局：沖縄県商工会議所連合会・内閣府沖縄総合事務局開発建設部)



セミナー風景（沖縄県トラック協会会長佐次田朗氏による講演）



## ●「第1回クルーズ船 またん めんそーれ フェスタ」を開催

(NPO法人 ナハ・シー・パラダイス協議会)

平成28年2月9日と2月11日、「第1回クルーズ船 またん めんそーれ フェスタ」が那覇市の若狭海浜公園を主会場に行われました。

沖縄はクルーズ船の寄港がここ最近増加しており、沖縄の認知度向上や観光客誘致に繋がるイベントとして同実行委員会が初めての試みとして行った、会場では創作エイサーや獅子舞・旗頭を地域団体が披露し、賑わった。

また、イベントの最終プログラムでクルーズ船の出港に合わせて約20分花火を音楽のリズムに合わせて打ち上げ、観光客・地元客でお見送りをを行い盛り上がりを見せた。

- 1) またん めんそーれ：また きてください
- 2) エイサー：沖縄の伝統芸能、念仏踊りから発展
- 3) 旗 頭：地域のシンボル、祭りで掲げてねり歩く



■地域団体の創作エイサー



■クルーズ船を見送る観光客・地元客

